

# 発明文化論

〈第78回〉

丸山 亮

## STAP細胞

1月下旬、理化学研究所の小保方晴子研究ユニットリーダーらによる画期的な成果との触れ込みで発表された「STAP細胞」は、その後、国民的な関心と呼びながら迷走を続けている。ごく若いマウスから採ったリンパ球を弱酸性の液体に短期間浸すだけで体細胞の分化状態を初期化し、どんな組織にもなれる新型の万能細胞が得られるはずだった。

発表は1月30日号の英科学雑誌「Nature」に論文が掲載されるのに先立ち、1月28日、理研で行われた記者会見や、30日リリースの理研ホームページで行われた。テレビや新聞は当初、この成果を大発見、大発明と持ち上げ、小保方さんは一躍時の人となった。

ところが、発表から半月もすると、論文の不備が次々と明らかになっていく。画像の使い回し、参考文献の他論文との大幅な重複、作成の裏付けが不十分で再現性がないなどだ。共著者は研究の根幹が揺らいだとして論文撤回の意向を示したものの、小保方さんと、彼女の留学時代の指導教官で論文に名を連ねるハーバード大のチャールズ・バカンティ教授は、撤回に同意していない。

論文の問題点を指摘され調査を続けてきた理研は、3月14日、調査委員会による中間報告を発表した。ここではSTAP細胞の存在は証明できず、研究は極めてずさんだったと認めて、理事長が陳謝するはめとなった。半月後の最終報告は、論文をめぐる六つの疑問点に答えている。STAP論文と小保方さんの博士論文との間に酷似した画像がある点は捏造、遺伝子解析の画像の切り張りは改ざんという評価だ。

ごたごたはこれで終わらない。4月25日には、理化学研究所内でSTAP細胞論文の不正を調査していた委員会の委員長自身も、責任著者をつとめた論文で画像の切り張りが認められたとして、辞任せざるを得なくなった。そして事件は思わぬ方向に飛び火する。STAP細胞と比較されることの多かったiPSの発見でノーベル賞を受けた山中伸弥教授まで、研究疑惑が持ち上がり、釈明を余儀なくされたのだ。しかも発表論文の画像の元データは保存されていないという。

一連の動きを追っていると、ネット社会の反応の素早さと酷薄さに驚かざるを得ない。獲得形質の遺伝を唱えたルイセンコの学説が正されるには30年かかったが、STAP細胞は発表直後から、ネット上で真偽の検証が始まっている。著者の過去論文までも引きずり出されて枝葉末節が調べ上げられ、その刃が発表者に向かっていく。関係者が辞任や陳謝に追い込まれたのには、脅迫に近いメールが殺到していたためともいう。ネットは両刃の剣だ。

今度の事件で功を数えるとすれば、研究態勢の不備に光が当たったことだろうか。検証に耐える記録を残す必要、実験ノートのありかた、共著者の役割分担、組織と研究者の関係、これらのすべてで問題があることが明らかになった。

研究者の倫理も新しい基準が必要となっている。引用や、画像をはじめとするデータの加工は、どこまで許容されるのか。議論が活発となるだろう。

もっとも研究者の意思にかかわりなく、社会の自浄力は発揮されていく。10年ほど前、常温超伝導の現象が見つかったとされた説は、今日捏造との判定で見向きもされない。ヒマラヤの氷河が2035年までに消滅するという予測の間違ひも判明した。

ところでSTAP細胞は昨年4月、理研などによってアメリカで特許出願されている。特許は新しい現象を見つけ、その特長を発明に結び付けたとき、成立する可能性がある。もちろん通常の知識を有する者が再現できるように明細書が書かれていなくてはならないが、学術論文のような厳密性は求められない。特許の成否も含め、STAP細胞はどこへ行くのだろうか。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)